八犬傳いぬのさゝし　卑十五　上壱

大傳大迦草紙

この巻

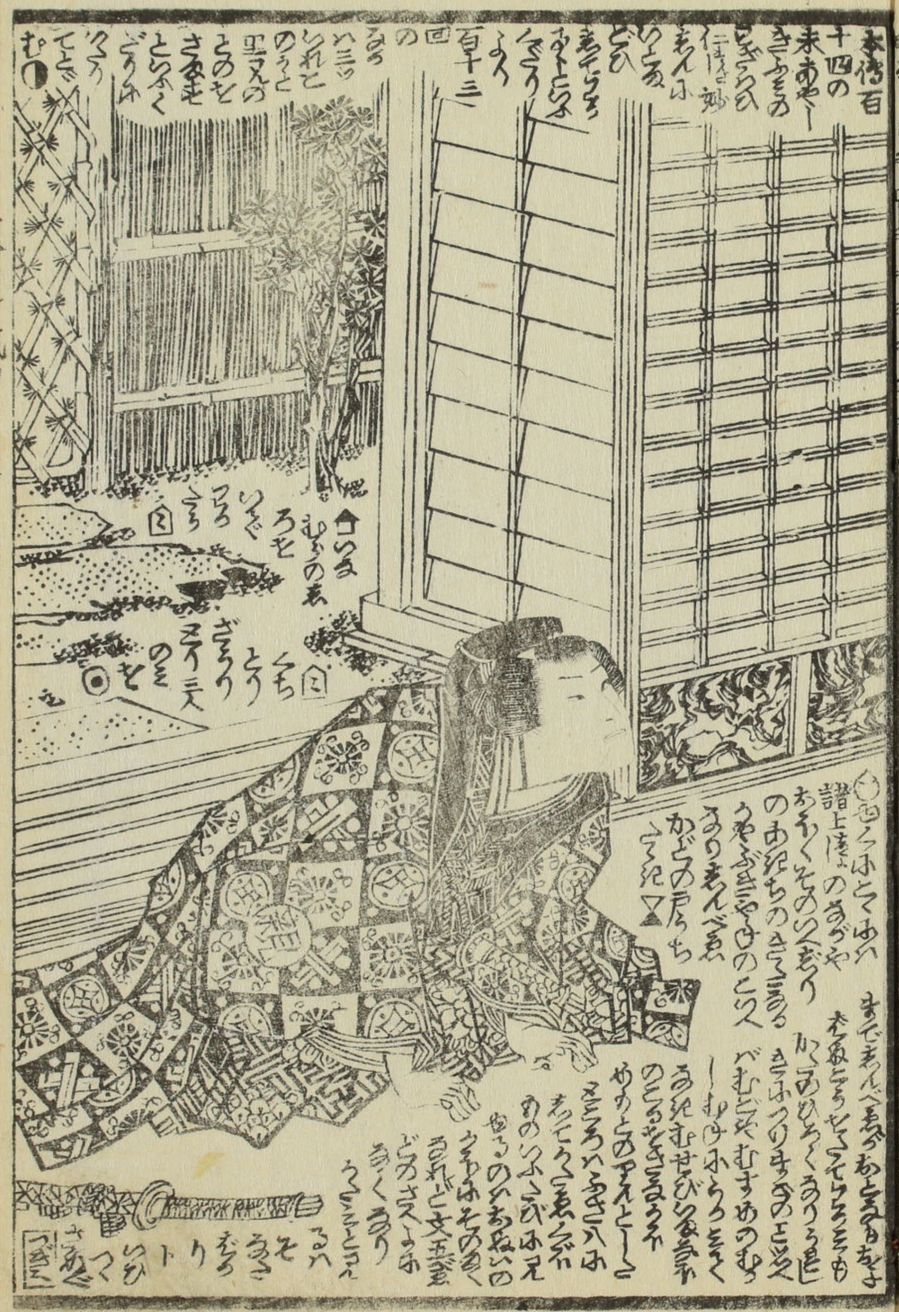
本傳第百三十回標題隻句に撰変を旋らく素藤牛狼の因を易せと有い
業偶の牛助もて狼之助と交易の一段を標せるにく是ぬと些の隠微あり此を
義成乃語に托し七百十三箇の音に託せり曰机上の理論い僞の虚文ぞ辞い要を学ぶ
あぐら名詮自性あれなあれば那素藤が狡猾ある牛助をもて狼之助に易登相と
なして礪時に易んとのひ喫元る即ち是人汝がい心なつの故や夫牛ハ仁獣ハ狼ハ
惡獣之又桐ハ直木ハ礪い磨石ぬて疎砥ハ仁獣の牛惡獣の狼に獻ぎらく直木
の桐疎砥の取さきに及ざるい猶孔子の盗跖に怒罵ら孟軻ハ臧倉り讒謗
らまてるが如し盗跖孔子を罵るとる孔子の聖人なるに害ハ臧倉孟軻を
誚と蚕子孟軻の大賢なるに害ハ』上如此説どるハ幼童達の悦びぬるぬ本文
ぬい省つぬど故要曲筆の到底るを黙止る本意ぬく巻端に載せ

文久三年 吏春

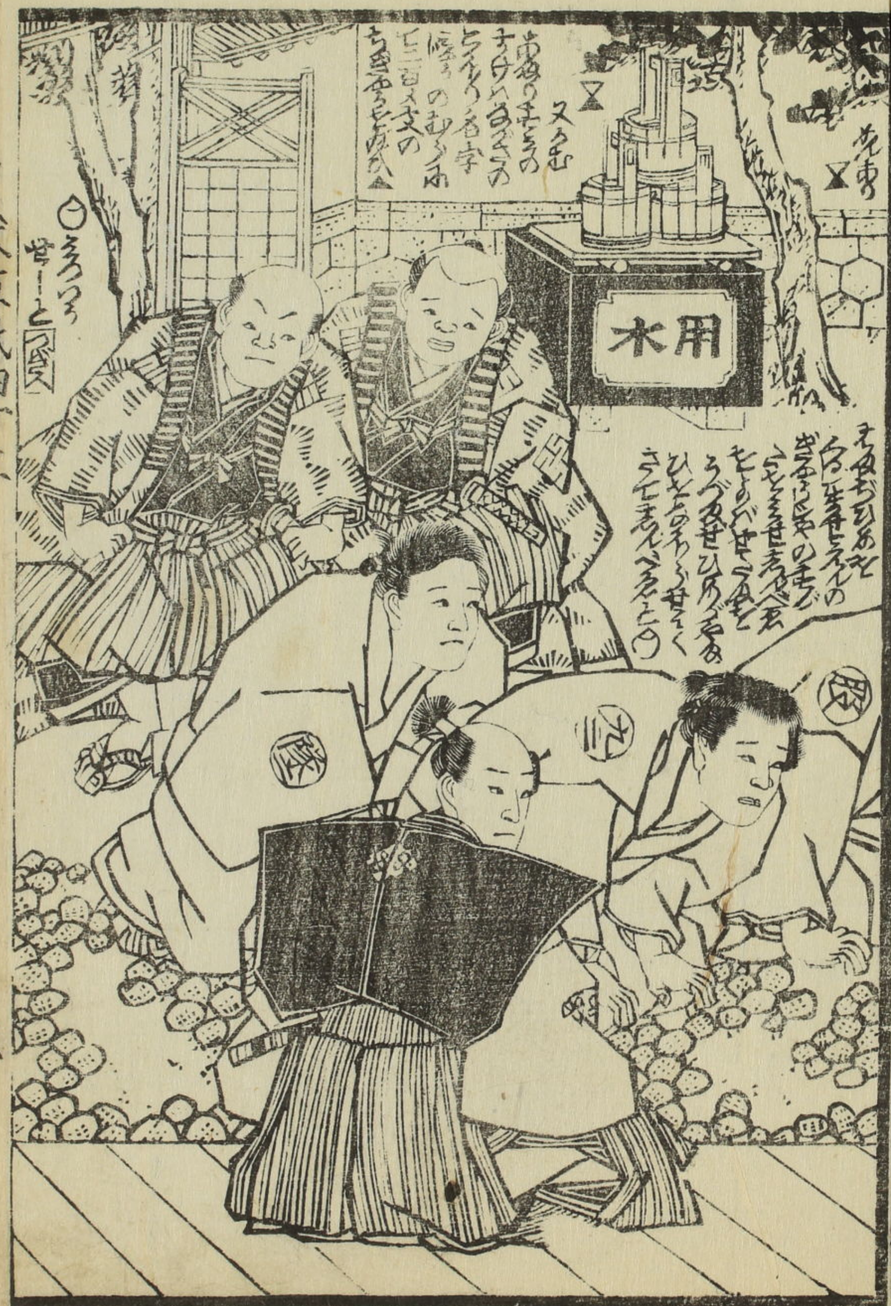
柳亭主人

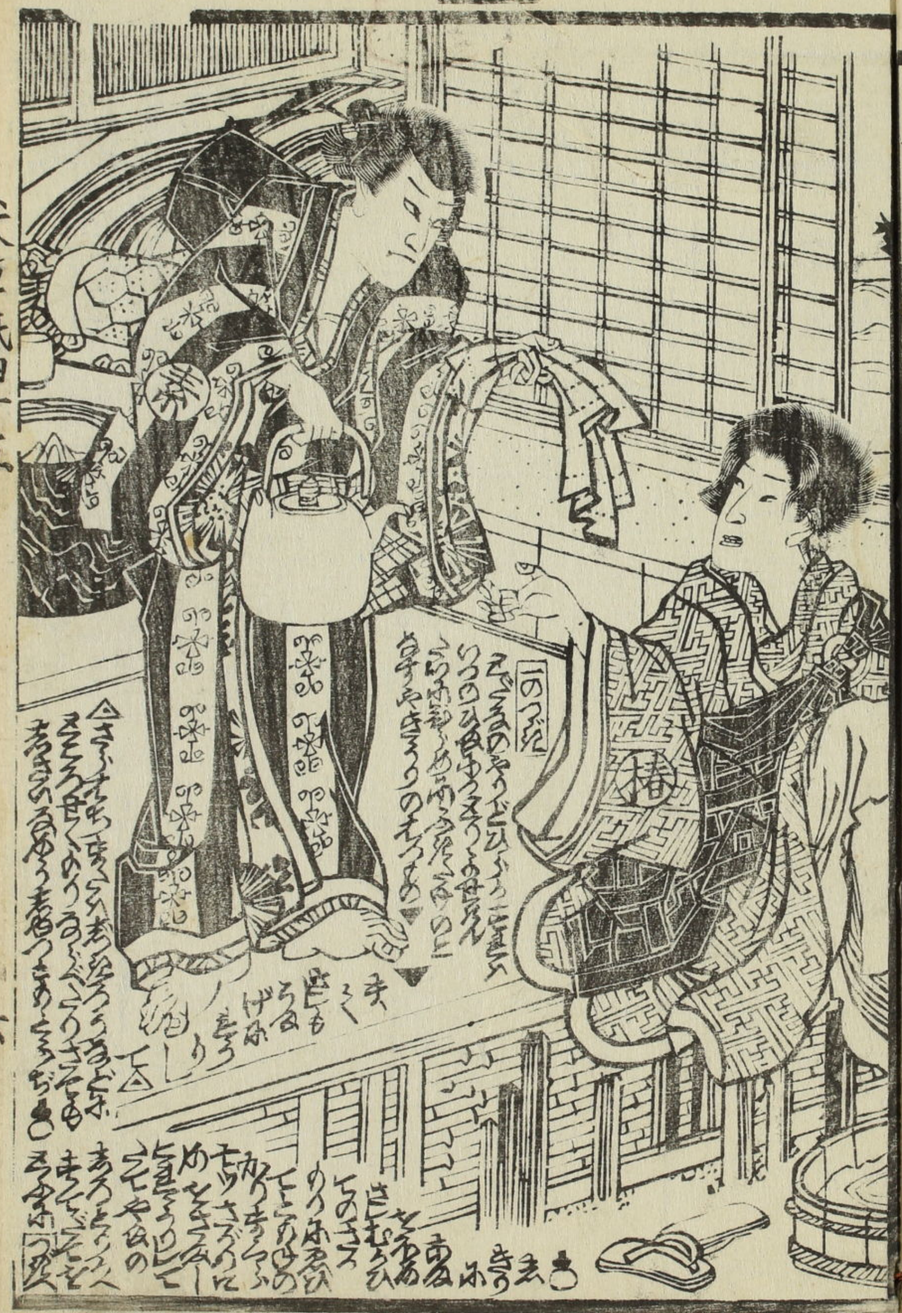
上野原の
賣茶店
正木女

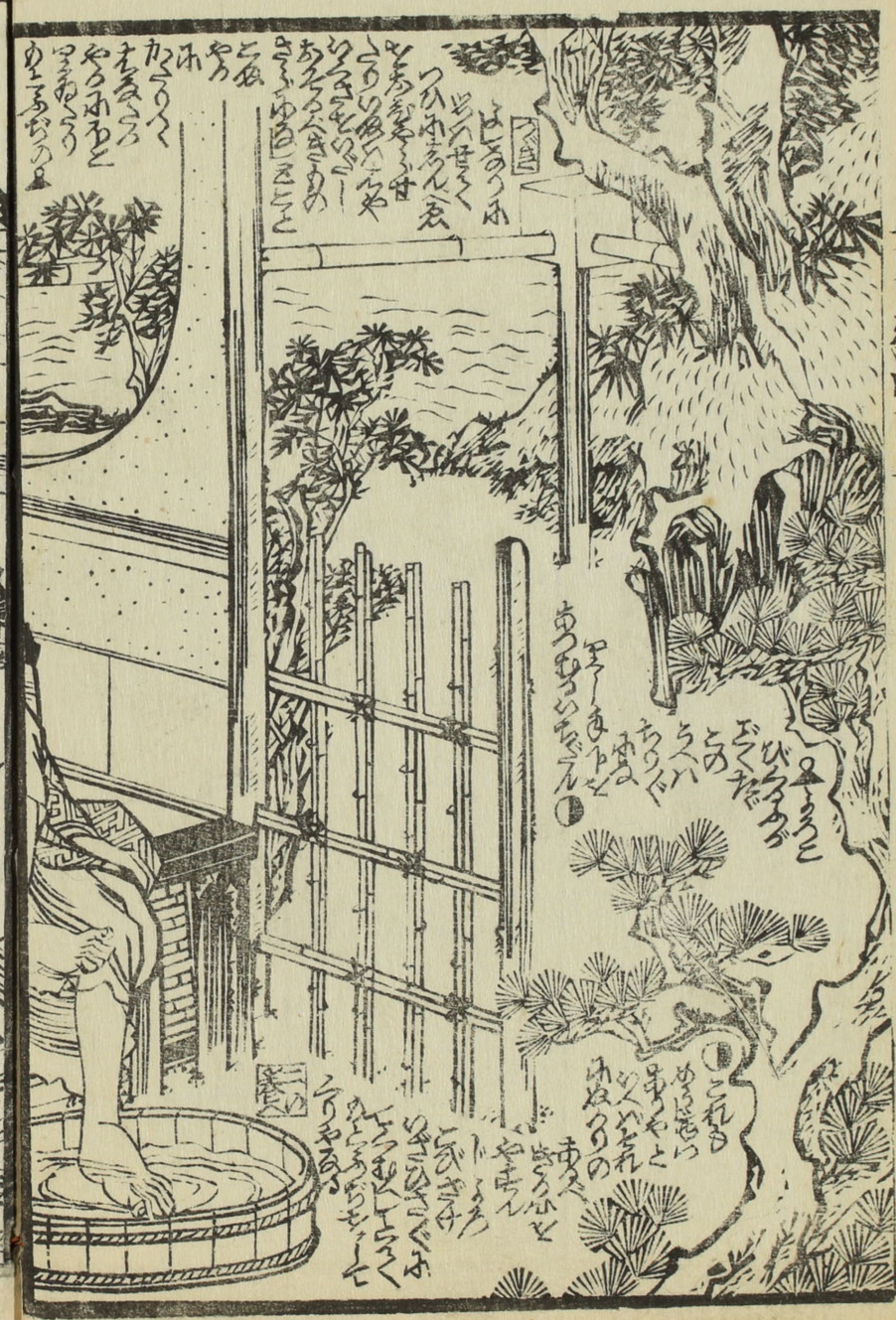
犬江親兵衛仁
河鯉孝嗣が
冤罪の船より脱
消息を聞
向岡へ往
と
夷八四十
七編より
詳あり



和布
日和屋


用木





くやろ

盃
本
盃

椿
本

椿が魔術
椿
連索を投て雲の様を

水家
實母散
まんぜんさんどうのいちのこと
中橋南傳馬町一丁目東ハ
千葉堂孝輔製

柳蔭月朝妻

四編より 山々亭有人作
九編迄 梅朝樓國貞画

襲黄鶴八幡不知

山々亭有人作
錦朝樓芳国画

當春賣出し所の柳蔭月の朝妻殊の外御贔屓にあひ製本手廻らず迄
賣捌に殷外聞旁難有仕合奉存候扨當年彼時頼朝門諸國を經歷在し事を
鎌倉の深く東八幡の藪の奥を探しつゝ夫婦一作者画工の更に言む彫摺等迄
念を入れ編て六七編迄無間遠出板仕る是亦柳蔭月の